

政社から政党へ(一)

——大分県の自由民権運動覚書——

野田秋生

はじめに

- 一 演説会・政談結社・政社の勃興
 - 二 愛国社——国会期成同盟——自由党の潮流への参加
 - 三 九州連合——九州改進黨の路線への参加
 - 四 大分県における交詢社の活動
 - 五 大分改進黨の結成
- は じ め に

大分県の自由民権運動史というものを、中央に対する地方、ことにも権力に対する民衆という視座から、どう組み立てるべきか、組み立て得るかということについて、いま私に成算はない。しかし幸いに多くの先学の努力によって、大分県の自由民権運動の姿は徐々に説明が進められて来ている。ことに岩田英一郎氏の『中津自由民権運動史』は、画期的な業績であった。本稿は、それらを整理したうえに僅かのことをつけ加えたものに過ぎないが、ともかくもこゝを出発点として、我が国近代の開幕期における民衆の、民主々義を求める奮闘の姿を、その栄光と苦惱とを掘り起こす作業を進めてみたい。

もちろん、明治政府の「上からの近代化」が県政機構を通じて大分をどう変え、または変えなかったか、そこに民衆の生活

としてどのような問題があったか、それらに対応するいわゆる「文明開化」の実態を明らかにすることがまず必要であろう。明治四・七・一〇・一四年といった画期の、それぞれの領域における変動をふまえながら、民権運動史に直接かかわっては、たとえば民権運動から県民会、初期県会の動向を明らかにしなければならぬ。

しかし、これらの課題はすべて他日を期すことにせざるを得ない。本稿は、主として一八七七（明治一〇）年以降一八八二（明治一五）年に至る間に、大分県に勃興した様々の結社と、その周辺にわき起こった民衆の政治的・思想的エネルギーが、その星雲的状况から、しだいに幾つかの流れに収斂または収束してゆく姿を、そこに働いた内外の力に留意しながら整理して大分県の自由民権期の歴史のあらましの見取図を作ってみようとするものであるにすぎない。

一 演説会・政談結社・政社の勃興

広池千九郎氏の「中津歴史」は、政談演説に従事した民権結社として、中津町に、共愛社、正従社、画一社、共立社、亦一社一貫社、の六社の名をあげ、岩田英一郎氏「中津自由民権運動史」もこれを探っている。また長野潔氏「大分県政党史」は、この他に竹田貫墳社と佐伯の青年久敬社の名をあげている。そして「中津歴史」がこれらの結社を「此頃」として一括しているように、これらの結社の活動の時期、メンバー、活動の内容や性格等については、従来は必ずしも明らかでなかった。

そこで、以下に明治一〇年代初頭を中心に県下にあった演説会・政談結社・政社を、管見に入ったかぎり拾いあげてみたい。ところで、一八七四（明治七）年の板垣らの民権議院設立建白書の発表と土佐立志社の設立、翌七五年の愛国社の創立が、いわゆる自由民権運動の出発点となり、以後各地に士族中心の結社が創設されることになるが、しかし民権政社の結成が本格的になるのは、一八七八年の愛国社再興大会以後であった。² 大分県でも、政社を、全国または地方における継続的な政治活動のための団体と定義すれば、それは七八年ないし七九年以降としてよいと思われる。しかし、主として政談演説を行なうことを業務とした結社という意味での政談結社や、結社としての組織化が必ずしも十分ではないという意味での演説会は、すでに

一八七七年には始まっていたようである。それらを、その存在が確認できる年ごとに整理すると、1表のようになる。

1 表 大分県下の演説会・政談結社・政社

	1877年 以前	1878	1879	1880	1881	1882
中津町	共憂社 亦一社 共立社 ?画 ?一	亦一社 第二亦一社 共立社 一社 貫社	亦一社 正従社 進修講談会	亦一社 親愛社 興成社 画一社再興 明治庚辰 講談会	合併	興成社
下毛郡		跡田演説会	猶興社	猶興社 共愛社 相愛社		
宇佐郡		高家演説会		?菱池講談会 再開	菱池講談会	
西国東郡			共謙社			
速見郡					鳳鳴社	
北海郡			白杵演説会	白杵演説会		折玄社
南海郡					久敬社 十四社	
直入郡	?奨順社		二輪社 (厘)	奨順社再興 貫填社	貫填社	貫填社
日田郡						三本松 演説会

当該年に史料上で1回以上その存在が確認できるものに限った

以下、それぞれについて若干の説明を加えてみよう。

〔共憂社〕

いうまでもなく、増田宋太郎が結成した士族結社である。たゞ結成時期については、大橋奇男「増田宋太郎略伝」は、増田が鹿児島から帰った七四（明治七）年六月から、大橋自身が本好千座と土佐立志社を訪う八月二五日までのこととしているの³に對し、松下竜一氏は、九月の柳田清雄宛川村燾一郎書簡の「結社創業の上は速に佐賀より崎陽に赴かん」と、十一月の日付をもつ増田の「集會趣意」⁵稿によって、一月ないし一二月説を提出している⁶。

しかし、大橋の「略伝」は八三年の著であつて、自身が共憂社結成後に土佐に行つたか、土佐から帰つて結成にとりかかつたかを、記憶ちがいすることは考えられないのではなからうか。けれども六〇八月説をとると、「集會趣意」稿の方は、立志社林有造らの「寸志兵編制願」や佐賀の乱の際の義兵編成の経験をふまえた行動であり、さてこそ「応身ノ兵役ヲ乞ハント（中略）連署以テ上請セン」とのべたものと考えられるけれども、川村書簡の「結社」が何を指すか、という問題があとに残ることになる。

また、川村書簡には、前引箇所のすぐ前に「殊に西京、大阪及高知ノ事情等総て大に得る処あり、故に今日目する所他なし盛に同盟を結び各県下にて大に士氣を振起し、然る上にて一、県より、二、三、の有志上京して、聊か為ス所アラント欲す」（傍点筆者）とあるのが注目される。川村研究を進めている安形静男氏は、愛国社合議書第二条の「各県各社より其社員兩三名を東京に出し」との酷似を指摘されているが、⁷ そうだとすれば大橋らは、立志社訪問によって愛国社構想を入手して帰つたこととなる。しかし、立志社内に愛国社構想が、「寸志兵編制願」の段階ですであつたとしてできるかどうか⁸、検討を要する問題であらう。いずれも、後考を期したい。

さて、共憂社のメンバーは不明である。しかし、増田の盟友として行動したのは、梅谷安良、川村燾一郎、岡部伊三郎、村上策、石松勝一、山尾忠二郎、西次郎太郎、大橋奇男、本好千座らであり、七七年の中津隊蜂起に参加した者に松本大五郎

笹部雅雄、平民後藤純平らがいる。

後藤純平は、一八七二年の庄内谷一揆の指導者、当時は中津で代言人をしていた。

梅谷や松本は、七七年の蜂起の際に死んだが、笹部は高田で捕えられ、福岡裁判所で国事犯として除族の上、三年の刑を受けたが、その後は弟の上田長次郎とともに民権運動に参加、自由党の結成にも名を連ねた。

川村矯一郎、村上一策、石松勝一らは、いわゆる高知の獄における高官暗殺計画グループとして逮捕された。川村はその後天竜川治水事業などに従事し、静岡監獄の典獄となり、出獄者保護更生事業の草創に尽力する。¹⁰

村上は、出獄後大阪に明治義塾を開き、愛国社関係民権家と交際しており、中津亦一社と愛国社を結び付ける上に一定の役割を演じたようである。¹¹

〔一貫社〕

『中津歴史』のほかに、今のところ、その存在を傍証するものを発見できない。

〔画一社〕

『田舎新聞』¹²一九五号に「演説会再興候間此旨江湖之諸君へ報道す 中津金谷画一社」という広告が掲載されており、七九年一月に活動を再開したことはわかるが、その後は同紙に演説会等の記事はない。再興とあるけれども、『田舎新聞』に同社の活動を示す記事が全くないから、あるいは同紙創刊以前に結成されていたのかもしれないが、不明とするほかはない。

〔正従社〕

結成時期不明。その活動は、『田舎新聞』にあらわれる限りでは八九年に集中しており、堀川闕無小学校を会場にして、しきりに討論会を開催している。¹³

〔共立社〕

『田舎新聞』四八号に「共立社桜町の演説会は来る廿一日の夜であり升」とあるのが、管見に入った最も早い記事で、七七

年一〇月の存在が確認できる。結成時期は不明。「田舎新聞」で、以後七八年八月まで演説会活動をおこなっていることを確め得る。その八月二三日号に「共立社員の演舌会も久しく休会せしが近頃須田辰次郎君の帰省もあり又た津田純一君も不日東上さるゝに付来る日曜日明後二
十五日の夜例の桜町学校に於て盛に一会を開くと幹事からのお知らせです」とあり、久しくというのは五月以来ということのようであるが、この記事から津田、須田の二人がメンバーだったことがわかる。須田は慶応義塾出身、三田演説会でもしばしば登壇しており、¹⁴当時は中津市学校教員として帰っていたものである。津田は福沢の推輓で旧藩主奥平昌迺のアメリカ遊学の随員として留学、帰国後は中津市学校教員、のち文部省に入り、各地の中学、師範校々長を歴任した。¹⁵以上から、共立社が福沢—中津市学校の人脈によって結成されていたことが推測される。

共立社は演説会のほかに、七八年五月、仲裁局というものを作っている。その広告では「共立社中更ニ社員ヲ抜摘(マ)シテ仲裁局ヲ置キ上ハ官ニ対スル冤柱ヨリ下ハ人民交際ノ不平ヲシテ必ス屈辱ノ患ナカラシメ」¹⁶んことを目的とし、場所は「船町岩井氏の宅にて乃ち裁判所の前」¹⁷であった。おそらくは今日の弁護士事務所、法律相談所のものであったと考えられるが、市民生活にこうした形で根を下ろそうとする活動を始めていることは、注目されてよいだろう。

なお、共立社演説会の会場は、次に述べる亦一社と同じく桜町の、光善寺である。

〔亦一社〕

亦一社の結成時期については推定の手がかりがある。すなわち、「田舎新聞」三九号に、「当中津有志輩二十名余発起して大に演説会を開かれ来ル十九日桜町小学校に於て発会になる由皆さん夕飯後より聴にお出なさい」という雑報欄中の記事がそれである。

当時の中津町には四聯学区が作られており、うち二聯区殿町進修小学校では進修講談会、四聯区堀川關無小学校では正従社の演説会が開かれていたが、三聯区桜町三旗小学校を定例会場としたのが亦一社であった（共立社は桜町光善寺を会場とした。桜町小学校でも開くようになるのは七八年以降であり、そのころ亦一社は桜町小学校の他に京町の久松氏宅でも開くようにな

っている)。したがって、七七〇七八年にかけて桜町小学校を会場とした亦一社発会の記事がこれであると推定してよいと思われ、そうすると亦一社発足は一八七七年八月一九日ということになる。

亦一社のメンバーには、宮村三多、上田長次郎、南摩昇次郎、南正次、飯田三次、一松豊栄、敷田彦三郎、蛸瀬暢造、中山又次郎、山田松次郎、佐藤栄、速見四郎、大森佐太郎、岩井福造、今石某、重松某らがあり、他に笹部雅雄、村上一策らが、社員ではないにしても極めて近い関係にあったと見られる。

このうち、南正次は「地方巡察使復命書」で社長とされているが、『熊本新聞』（明治二年五月八日号）には「亦一社々長南省吾」と出ている。宇佐郡拜田の出で、はじめ省吾と言ひ、のち正次と改めた。族籍は平民で、かつて御許山騒動に加わったこともある人物である。しかし亦一社々長については、河野広中が、上田長次郎からの直接の伝聞として「社長ハ宮村三多氏ナル由」と記しており、おそらくこの方が正しいと思われる。

宮村三多は士族、川端氏に生まれて宮村氏を嗣いだ。両氏とも小役人格の下士である。飯田三次とともに国会開設請願の上願委員となり、国会期成同盟第二回大会にも参加した。亦一社解散後もしばらくは活動を続けたいが、その後、千葉県下で教員となり、帰郷後は保守、官権派の豊州会に参加している。

飯田三次は平民。上願委員として上京後は三田同朋町に住み、交詢社員となっている。

上田長次郎は、笹部雅雄の弟で上田由二の養子となった。両氏とも下士である。兄の笹部雅雄は、先述したように増田蜂起に参加して捕われ、国事犯として除族され平民となった。出獄後、弟とともに民権運動に参加し、八一年の自由党結成にも参加しているが、八五年に京都府下に移住している。

上田長次郎は、七九年には河野広中や植木枝盛ら民権運動の最もすぐれた部分と接しており、愛国社―国会期成同盟の潮流に最も深くかかわった大分県人である。彼はのち『東洋自由新聞』の記者となり、西園寺公望の密勅事件暴露によって松沢求策とともに下獄している。一八九四（明治二七）年の第一次伊藤内閣で西園寺が文部大臣になったとき、その秘書係となった

上田戴憲が、彼である。

南麻昇二郎も小役人格の下士。七九年の愛国社第三回大会に出席しており、亦一社の有力社員であつたらしいが、のち東京三田に住み、交詢社に参加している。²⁸

一松豊榮は、宇佐郡横山村庄屋広山氏に生まれ宮夫村一松家に養子として入つた。²⁹七四年に一松小学校助教となつており、七九年の第一回県議會議員選挙に当選しているから、地租一〇円以上すなわち一町五反歩以上を所有していたことになる。県会での活動は必ずしも活発ではなかつたようである。³⁰

敷田彦三郎は士族である。一時中津市学校教員をしていたが、亦一社参加後は宮村三多と最も親しかつたようで、同社解散後も行をともししている。のち県議員になつている。中山又次郎は下士東条利八の三男。東条利八は福沢諭吉の叔父にあたるから、つまり中山は福沢の従弟である。蛸瀬暢造とともに代言人となつて、亦一社からは離れて行つた。³²

山田以下については、今よくわからない。今石、重松の二人は宇佐郡で、平民であろう。

さて、亦一社の活動の中心は演説会であつたらしい。「田舎新聞」が報じている亦一社演説会は（七七年後半と七九年七月の間を見ることができないので、実際よりも少ないが）、七八年一七回、七九年一一回の計二八回である。同紙が報じている回数で、これに次ぐものは明治庚辰講談会と共立社の六回、正従社の五回であるから、もちろん亦一社以外の演説会がすべて報じられているとは限らない（じっさい、亦一社演説会については演題まで報じることがあつて「田舎新聞」の亦一社に對する取扱いは、他の場合と若干ちがっているとも思われる）が、亦一社演説会が中津では群を抜いていたと考えてもまちがいでないだろう。

「田舎新聞」が報じている論題をあげると、つぎの通りである。内容はわからないが、およその傾向を知ることができよう。

（七八年三月二五日）○外人雑居ノ利害 ○世ノ改革ハ漸進ヲ可トスルカ急進ヲ可トスルカ

（同四月二八日）○明治政府は圧制政府か否か ○支那窮民可救か否や

(同六月七日) ○我国方今の景況にて物産と教育の盛大孰れか急務 ○身代限を息子に及ぼす利害

(同七月二日) ○民撰議院設立の時猶速乎否や ○佩刀を許し撃剣を奨励するの利害

(同八月三日) ○国に無雙の智者あると各人其智を分有するとの利害 ○復讐心と嫉妬心は孰れか其害大なる

(同八月一七日) ○善良ナル庄制家ト暴悪ナル庄制家トハ社会上ニ於テ孰レカ利ナル ○稀世理学士ト英敏ナル政事家トハ一國ニ於テ孰レカ利ナル

(同九月七日) ○自由貿易と保護税を課するの優劣 ○馬関開港の利害

(同十一月二五日) ○郡区长官撰公撰孰れか利なる ○学校教員の年令に制限を設くる利害

(同十二月二一日) ○自山性命孰れか重き ○養子を廢するの利害

亦一社は、演説会の他にどういふ活動をしていたかはわからない。たゞ、七八年六月に第九大区第一小区(中津町)民会の役員改撰に際して生じた紛糾を、亦一社々員の調停によつて解決し、無事に新役員がきまつた³³ということがあり、市政の実際においても、この段階ではある程度の力をもつていたことを推察させる。

〔第二亦一社〕

亦一社から独立していたものかどうか不明であるが、「少年輩^{わかもの}」が開いていた演説会がある。山舎新聞で、七八年九月、七年一月、同一年の三度報じられている。このうち、七九年一月一日の演説会には、京町中村宗太郎三男菊三郎(一四才)が警察を批判して拘引され、³⁴同二日に中津裁判所で「誹謗律第四条ニ依り罰金拾円申付」³⁵けられている。

〔進修講談会〕

先述したように、第二聯区殿町進修小学校を会場に開かれた、ということ以外にわからない。たゞ、「田舎新聞」に進修講談会の開催が報じられている七九年五月三日、二四日には亦一社演説会も開かれており、せまい中津町で同夜二カ所の演説会

が開かれているのは、単なる偶然とは思えない。

それにしても、この五月は、三日（亦一・進修）、一〇日（正従）、一七日（正従）、二四日（亦一・進修）、二七日（正従）と七演説会が開かれている。盛況思うべしである。

〔明治庚辰講談会〕

これについては、次節および四節で詳しく述べるが、メンバーについて若干ふれておけば、つぎの通りである。
奥平每次郎 中津市学校の、今で言えば理事長にあたる。

猪飼麻次郎 慶応義塾出身、三田演説会にしばしば登壇している。中津市学校、慶応義塾教員。

島津万次郎 旧藩庁内で熱心に福沢を支援した復生の嗣子。鶴屋商会の役員。

中野松三郎 慶応義塾出身。三田演説会にも登壇。国立第七八中津銀行支配人。

村上田長 旧藩医。「田舎新聞」創立時の社主。のち大分中学校長、玖珠郡長。

西次郎太郎 道生館出身で増田宋太郎の友人。「郵便報知新聞」記者をへて「田舎新聞」編輯長。

中山本太郎 宇佐郡出身。公撰民会の議員などをへて「田舎新聞」編輯長、ついで社長。代言人。

奥平から村上までは旧藩上士³⁷、西は下士³⁸であるが、中山とともに「田舎新聞」に拠る有力者で、要するに中津における第一流の名士・有力者であり、かつ大半が福沢直系ないしその人脈圏内に属するものばかりであることを確認しておきたい。

〔親愛社・興成社〕

一八八〇年一月に亦一社は解散し、すでに解散していた親愛社の旧社員と合流して興成社を結成した。³⁹ 親愛社についてはよくわからないが、「巡察使復命書」に「西南ノ変賊徒ニ与ミシ刑期満テ放還ノ徒中里又二郎桜井辰巳山田初次郎等亦一社ニ連合ス⁴⁰」とある記事に符号する。興成社には、旧亦一社から宮村三多と敷田彦三郎が参加したことは確認できるが、⁴¹ その他は不詳。

〔跡田演説会〕

「田舎新聞」一一四号に、下毛郡第五・六小区の小学教員その他「少年輩」が、「第二日曜日」に跡田村琴川学校で演説会を開いている旨の記事がある。第二日曜日とあるので、七八年一月ころ定期化していたものゝようであるが、詳細は不明。たゞ、この跡田村琴川学校とは、七六年に儒者村上姑南が村上田長らとともに開いた琴川学舎を指すものらしく、その生徒中には、七九年まで後述する梅木芳太郎がおり、「少年輩」の一人であった可能性はある。

いずれにしても、当時の学校が果たしていた役割の一面がうかがわれよう。たゞし、琴川学舎は、私塾であって、漢洋の二学科があったようである。⁴³

〔相愛会・津民共愛社〕

八〇年一月ごろ、下毛郡津民溪の有志輩が申し合せて、大野村に共愛社を設立し、演説会を開き、かつ詩歌文章も作ったという。⁴⁴ いわば教養、学習結社のなものを感ぜさせる。ところで、先述した梅木芳太郎は三郷村の人であるが、八〇〜八一年のころ、熊谷直義、石松勝一、笹部雅雄らと親睦温尋智識交換の目的を以て相愛会なるものを設立している。⁴⁵ 石松、笹部はすでにふれた。梅木芳太郎のちに大分改進黨に属し、同村の熊谷とは政敵として激しく争うようになる。

また、八〇年七月、下毛郡西谷村の河野頼策、津民村の梅木彦三郎らが、中津豊後町で政談演説会を開きたい旨を其筋に届け出ている。⁴⁶ 集会条例によって届け出たものであろうが、許可されたかどうかは不明である。彼らがどのような結社を作っていたかも不明である。河野のちに県会議員となり、梅木彦三郎は豊州会に属して梅木芳太郎と対立する。

梅木彦三郎は津民村で、先の共愛社が彼らの結社だとすれば、教養・学習的なものから政談結社への発展を示すものであるが、相愛会と共愛社という名前の相似も気がかりであり、この三つの記事の関係については後考をまちたい。

いずれにせよ、八〇年になると、草深い耶馬溪山村にも政治意識の目ざめが急速に進みはじめている状況を知ることができよう。

〔加来猶興社〕

下毛郡加来・成恒・一松村の有志が、七九年一二月ごろ、「毎月数回」の演説会を開いており、猶興社と称していた。⁴⁷メンパーは不明である。しかし、八〇年九月、猶興社は「桑園会社設立に着手」⁴⁸しており、中津の末広会社との関連であるが、加来村での桑園経営指導者に加来素吉がおり、おそらく彼が猶興社の指導者ではなかったかと思われる。のち、下毛郡有志親睦会を主宰して大分改進黨結成の推進者となり、県会議員としても活躍した。キリスト教に入信したともいう。⁴⁹

〔高家村演説会〕

七八年一月、上・下・東・西・浜高家村の「少年」が、山中三郎宅で演説会を開いている。⁵⁰前後の状況は不明であるが、山中三郎は、日田県管轄時代に松方県令から地方産業振興委員に任命されていた名望家であり、その居宅を会場としている所を見れば、ある程度の活動はあったと思われる。

〔菱池社講談会・宇佐討論会〕

『田舎新聞』二六一号に「宇佐郡菱池社の講談会も再び盛大に至り」という記事が見え、八〇年一〇月四日、宇佐学校での演説会の演題が報じられている。しかし、これ以前の菱池社に関する記事は管見に入らず、活動開始の時期は不明である。

たゞ、宇佐郡は、下毛郡とともに「夙トニ民会ノ設ケアルヲ以テ、人々能ク権理ヲ説キ」といわれ、⁵²県令香川真一が七八年に公布した「県民会仮規則」⁵⁴に対して批判を浴びせ、その改正案一六カ条を作って県庁に突きつけ、⁵³香川から「浮薄輕佻、頻リニ民権ヲ主張ス」と言われたのも宇佐郡であった。こうした背景を考えると、菱池社の活動はかなりさかのぼるのではないかと思われる。もっとも、たとえば田舎新聞は、宇佐郡の動きをかなり頻繁に伝えているにもかかわらず、政談結社や演説会については、先の高家の場合と、後出の宇佐討論会以外には菱池社しか記事がなく、あるいは事実あまり結成されなかったのかもしれない。

菱池社の演説会に登場する人物、およびその論題のわかるものをあげれば、つぎの通りである。

(一八八〇年一〇月四日) ○擇言論(酒府普照) ○演説討論会ハ少年子弟ノ學ブベキモノニアラズ(加藤政一) ○清魯ノ
關係(佐々木市松) ○腕力論(佐藤又四郎) ○信偽ハ危難ニ因テ顯ル(江島久米雄) ○罪惡ノ根ヲ斷ツベキ法案(佐藤安
良)

(同年一〇月二三日) ○教育論(桐畑市太郎) ○平衡論(佐藤又) ○信義論(加藤) ○家勢力説(橋本豊彦)
(八一年三月三日) ○農學講ゼザルベカラズ(佐藤安) ○眼鏡ノ説(佐々木)

このうち、江島久米雄は八〇年から県会議員、八二年の大分改進黨結成の推進者である。佐藤安良は旧姓奥平、南宇佐の酒
造家佐藤千英の養子で、八二年の植木枝盛のいわゆる酒屋會議に参加、⁵⁵同年九月一日、速見郡浜脇村崇福寺で大分県酒造人
會議を主宰した。⁵⁶

演説内容はわからず、演題からの印象では政談演説会と言えるかどうかさえ疑問である。

ところが、菱池社は八〇年一月三日「凶荒予備貯蓄法」について、秘密会にした上で討議を行っているのである。⁵⁷もちろ
ん「凶荒予備貯蓄法」というのは、同年に政府が各県に命じて臨時県議會で成立させ翌年から施行させようとした備荒儲蓄法
案のことであって、大分県では同年一〇月二五日に臨時県議會が開会されたが、宇佐郡選出の副四郎一を先頭とする猛烈な反
対で、ついに翌年まで審議棚上げの建議が可決され、⁵⁸県令西村亮吉が県議會を停止するという事態になった。この議會と県令
の激突事件で、建議を発したのが江島久米雄であり、菱池社がこの問題を討議した一月三日は、建議可決の二日前のこと
であった。

菱池社は、先の論題から受ける印象と異なって、シビアな政治課題の論議も行っていたのである。

なお、田舎新聞二五三号に「宇佐学校内にて毎月二回討論会は江島久米雄、佐藤安良、麻生齊二始め三拾余」という記事が
ある。菱池社講談会と重なる名が見えるが、この記事が八〇年九月一二日で、菱池社講談会の方が一〇月四日の演説会につい
て「再び盛大に至り」と言われていることから、別のものとも思えるが、あるいは九月の討論会から一〇月の演説会へと「盛

大に至」ったのかもしれない。

〔高田共謙社〕

七九年一月二五日に開業式を行なっている。会長に下瀬文蔵、副会長安藤安吉、幹事齋海百郎、銅直安平で、社主は植木松二郎、田舎新聞は「何れ民権家の世話」と評している。たゞ、開業式とは定例演説会開始の意味らしく、共謙社結成は若干これより早かったようである。

下瀬文蔵は医師、七八年の県民会議員、翌年から県会議員。安藤安吉は農、のち県会議員。齋海百郎は私塾教師、算数教科書「書算童叢楷梯」の著もある。のち県会議員、安藤とともに論陣を張り、県会内の左翼に位置した。銅直安平は高田の商、植木松二郎は高田の工で、ともに彼らはのちに交詢社員になる。

〔立石鳳鳴社〕

〔田舎新聞〕二九八号（八一年三月一六日）につきのような記事がある。

「速見郡立石村にては胡麻鶴岩吉氏の発起にて（中略）近村の有力者と謀り鳳鳴社と称する一社を創立し教育、衛生、工業其の他公益に係る事を議し社員二名以上の決議に依て議題とし該社の意見として村内或は近村にまで忠告懲憚することとし（中略）議論も頗る煥発なりと云ふ然れども傍聴を禁ず」

右の記事からすれば、鳳鳴社は政談結社ではなく、演説会などはしていないようである。社員の議論によって社としての意見をまとめ、地方政治、行政への働きかけをするという典型的な地方政社として出発したものと思われる。

胡麻鶴岩家は、立石領の御用商人の家である。岩吉は立石学校の教員となり「非常の勉強にて校則を改良し」、形にとらわれない自由教育を行なつたらしい。この胡麻鶴岩吉が「豊後立石史談」の著者胡麻鶴岩八であれば、彼はのちに在地唯一人の自由黨員となっている。⁶⁴

〔白杵演説会・折玄社〕

白杵演説会の発会は七九年二月一日、会主は士族可児矢、会員はこのとき一八名であった。⁶⁵その後、八〇年九月二日に会長は岡健一に交替している。⁶⁶

白杵は「士族元門地家は其權威を貶すことなく乎々たる平民を閉口低頭せしむ」とか「士族中に白杵社会（つゝ）を設け士族一般の利害を議する議員は旧お歴々旧中等以下はこれを旧藩政庁視し門閥社会と名けて可なり」⁶⁸などと言われており、旧藩時代の城下町の枠組みが強く残っていたらしい。七九年の県議会で議員になったもの全員が、旧藩上士に属する士族で、こういう例は県下各選挙区に例がない。

しかし、士族授産会社として豊後最大の留恵社の破産など、白杵の町と士族社会にもようやく変動の波が激しくなろうとしていたのもこの頃であって、白杵演説会は、そうした状況を背景に出発したのである。

白杵演説会の、判明するメンバーと論題をあげると、つぎの通りである。

(一八八〇年二月某日・第三回) ○政府ト人民ノ関係(可児矢) ○中央集権(岡健一) ○白杵商家ノ衰微ヲ防グ策第二

(南和) ○学問ト実業ト異ナル論(高田穆)

(同年四月某日) ○神經論(岡) ○政府ト人民ノ関係付悪疫予防(可児) ○民ハ國ノ本(小川弥十郎) ○徴兵論(高田)

○錢神論ヲ読ム(山田俊長) ○偏見ノ害(中村新一) ○結合力ノ効用(河本五朔)

(同年九月五日) ○権道動モスレハ権道ヲ過チ便法数々便法ヲ失ス(岡) ○教育論(南) ○結社論(吉田祥三郎) ○貨

幣論(高田) ○習慣論(稲葉唯七) ○偏見ノ害(中村) ○実学ノ効用(小谷作次郎) ○有形ノ労働(保住源吾)

ところで、これらの演説会に対しては寄付が寄せられており、「田舎新聞」には数回の謝礼広告が載っている。寄付者は、可児幸次郎、平野弥八郎、小手川甬三郎、三浦義秀、日高健次郎、宮崎虎五郎、中西潤蔵、渡辺秀吉、甲斐完三郎、本田利平、田中龜蔵らである。可児、小手川、田中は国立百拾九銀行佐伯銀行白杵支店出資者である。

八〇年五月に公布された集会条例に、民権政社の活動は大きく制約されたが、県内では中津亦一社が建白を行なおうとした

(後述) ほか、白杵演説会は七月、県に対して「集會条例御發行ニ付伺」を出している。一〇カ条に対する県の指令はつぎの通りであった。⁶⁹

「文学工芸等ニテ政治ニ関セザルモノハ該条例ニヨルニ及バズ」

「維新以前ニ係ル政体歴史及外國政体歴史ト雖氏引用可否スルハ政談論議ニ関スルニ付該条例ヲ遵守スベシ」

「政体ヲ誹議セザルモ衆ヲ集メ政治ニ関スル事項ヲ講談論議スルモノハ一切条例ノ通心得ベシ」

先にあげた演題では、余りに例が少ないから断定はできないが、八一年四月と九月の間に劇的な変化はないようである。

しかし「田舎新聞」二七一号に、八一年十一月三日、白杵観瀾樓で有志者五〇名が集まり、一社を結合して國事を談ずる目的で、自今毎月二度政談することを決め、その夜は「人民権利の原因等」であったという記事が出ている。白杵演説会の集會条例に付いての伺に対する指令が出されたあとに「國事を談ずる目的」を明確に打ちだしていることからみて、政談結社の段階への新たな発展が行なわれたものと考えてよいであろう。一八八二年の「地方巡察使復命書」が「旧白杵藩ハ福沢余流者ノ教唆スル所ニヨリ同土族岡健一南和等之ニ応シ折玄社ナルモノヲ設ケ改進黨主義ヲ唱フ」と述べているのが、結成時期をあげていないために断定はできないが、この八一年一月の「一社を結合」をさすものではなからうか。⁷⁰

福沢余流とはだれのことかわからないが、白杵出身者に莊田平五郎や箕浦勝人らがいるから、この報告は正しいのであろう。
〔佐伯久敬社・十四社〕

「田舎新聞」七〇号は、七八年初めの佐伯について「区會演説會等の如きは其何たるだに知らず」と書いているが、七九年五月のころ「近頃壯年の有志一月兩度演説を開く」と報じて、新しい動きを伝えている(一四九号)。

しかし、明確な動きは八一年までは見られないようである。八一年八月ごろ、南海郡那佐伯久敬社が結成され、一八日に佐伯広小路の某亭で演説會を開いている。⁷¹ また一方で、帰省中の矢野文雄、藤田茂吉を迎えての有志者の一大親睦會なるものが開かれ、十四社が結成されるなど、急に動きがあわたしくなつて来る。⁷³

「南海部郡佐伯久敬社々則」は二五條からなる。その一部を引くと、つぎの通り。

第壹條

本社名称ヲ久敬社ト付シ社員専ラ友誼ヲ厚フシ互ニ相戒テ品行ヲ正フシ共ニ相勉メテ（中略）天賦固有ノ權利ヲ全フセンコトヲ主旨トス

第七條

凡本社員タル者ハ金壹圓五拾錢ヲ出シ之レヲ貯蓄シテ社有ト為シ其利子ヲ以テ一切ノ諸費ニ充ツルモノトス

第拾參條

智識交換ノ為メ毎月兩次演説或ハ討論ノ会ヲ開キ社員協議シテ其場ニ臨ムモノトス

第十九條

社員ノ中演説会場ニ於テ若シ法律ニ抵触シ、罰金等課セラルルハ社有金ヲ以テ之レヲ償フモノトス（停点筆者）

社長は佐藤藏太郎である。「報知新聞」記者、矢野文雄（竜溪）の「経国美談」の筆記者であり、中津市学校教員、田舎新聞の常連投書者であり、同紙に「月水奇遇艶才春話」という青年教師を主人公とした連載小説を書き、のち多くの郷土史誌を著している。社則に、法律との衝突を予想する規定を設けたところに彼の意図がうかがえるが、八一年八月一八日の演題はつぎのようなものであった。

○名称ノ弁（松野茂平）○交際論（金田八蔵）○言行ヲ顧ミ行言ノ顧ミル可キノ説（首藤与吉）○和ヲ貴ブノ説（青山作十郎）
○女子教育論（石田豊城）○諸芸能ハ相因テ離ルベカラザルノ説（佐藤応助）○巡査ノ討論会ヲ設ケタルハ大ニ之ヲ啞フ可キ歟将タ些力賞ス可キ歟（佐藤藏太郎）

この夜、聴衆は「無慮五百名に及びしと云ふ」盛会であった。

一方、十四社については結成時期は不明。「矢野文雄藤田茂吉ノ（中略）誘導ヲ受ケ（中略）演説ニ従事スト雖氏全ク矢野藤田

ニヨリ運用ヲナスモノ」であつたと、前記「復命書」は記している。矢野、藤田の演説会は、八一年八月三十一日に開かれてい
 るので、あるいは十四社の旗上げはこの日であつたかもしれない。会主は中島固一郎、社員に加藤精一、佐藤誓三郎がいた。
 中島は士族、七八年の県民会議員、のち県会議員で、大分改進黨の結成に活躍する。

佐藤蔵太郎はとうぜん矢野の人脈にあつたわけであるが、久敬社と十四社の間がどういふ關係になつていたのかは不明であ
 る。

〔契順社〕

竹田の契順社は、一八七七年西南役で竹田士族が蜂起する以前に結成されており、七九年八月ごろ再興したらしい。⁷⁶八〇年
 二月に演説会を開いたことが確認できる。メンバーは、山田虎一郎、北条時房、桂淳一郎、刈野勝也である。桂は県民会の議
 長になつており、刈野はのちに宇佐郡長、改進黨系である。⁷⁷

〔貫墳社〕

はじめ二輪（厘）社と称した。結成時期不詳。「朝野新聞」明治一三年四月二四日は、改称して遷喬社となつたと報じるが
 「田舎新聞」二一六号は「竹田の二厘社といふ読書会は規則を改め貫墳社と称して演説討論を主とすることになり現員五拾名
 に及びたり」とあり、「復命書」も「熊本県遊説員ノ自由論ニ左袒シ士族百四五拾名ヲ募リ貫墳社ヲ設ケ政談演説ニ従事
 ス」とあつて、やはり貫墳社とするのが正しいようである。⁷⁹

こゝでいう熊本県遊説員とは、熊本相愛社をさすものと考えられる。すなわち貫墳社員に竹田出身の秋岡徳郎がおり、彼は
 熊本相愛社員でもあつて、相愛社機関紙「東肥新報」の記者となり、遊説員としても活動しているのであつて、この秋岡徳郎
 の線で、貫墳社が急進的な相愛社に結びついた結果、県下の政社の中で異色の動きをする点については、三節および六節で述
 べる。

社主は久保敬徳で、藩医であつた。

〔三本松演説会〕

一八八二年三月一五・一六日、日田郡三本松定舞台で政談演説会が開かれている。その論題と演説者はつぎの通りである。⁸¹

○官民均力論（山田耕一） ○自由將に死なんとす（加藤松五郎） ○治者被治者の関係（河野一郎） ○文明の種子は田舎に生じて其華都會に開く（山田） ○外人の侮辱を受けるは偶然にあらず（加藤） ○我国方今の形勢（河野）

両夜共聴衆四百余人ありと報じられているが、何か結社のようなものがあつたかどうかは不明である。後述する大分改進黨結成に向けての動きの一環であつたかもしれない。加藤松五郎は、のち県會議員になる。

以上、県下の演説会、政談結社、政社の管見に入つたものを概観したが、もちろん史料制約によつてなお逸しているものも多いにちがいない。したがつて、今のところでの一応の整理をすれば、大略つぎのようになるのではなからうか。

(一) 県下では、中津が自由民権の動きの先駆をなした。それは「旧中津藩ハ福沢論吉ノ薫陶ヲ受クルモノ多キヲ以テ夙トニ民権論ヲ唱へ演説等ニ従事スルモノア」⁸²る故と言ふことができよう。しかし後述するように、それは必ずしも福沢思想一色であつたことを意味せず、プラスにもマイナスにも、もっと様々なるものを可能性として持っていたことを見落としてはならない。

(二) 豊後の各地に運動が広がるのは、ごく大まかには北から南へという方向で、一八七九（明治一二）年以降としてよからう。

(三) しかし竹田地方については、熊本方面からの波及という、県下では独特な形をとっている。

(四) 活動家個々についての調査は、今後の課題であるが、全体としては士族がリードしている。たゞ県北三郡では、いわゆる「豪家の農商」がリードしていることは注意されねばならない。

(五) 旧府内・日出・杵築・森藩域には、史料制約のせいもあるが、目立つた動きが見られない。

各地の社会経済的状況の比較や、旧藩士族を中心とする思想的・文化的な、幕末期以降の動向の検討が必要であらう。

(六) 演説会の論題から見てとれるように、一・二を別として、思想的にはお雑然としており、自覚的に自分の思想的立場を定

立しえていないと思われるものも多い。たゞ共通的には、明治一〇年代初頭の時代的条件にうながされての政治意識の覚醒を見ることのできるということであろう。

したがって、八一年までの状況については、それぞれの結社が、それぞれに自分のすすむべき方向を模索している段階であり、混沌として、ほとんど星雲状態にある思想的・政治的エネルギーが、どのようにして、どの方向へ自己確認の道を歩んで行ったかが、つぎに検討されなければならないであろう。

- 1 下巻二九九頁。項としては明治一三年。
- 2 「自由党史」(岩波文庫版、以下同じ)上巻二五〇頁。
- 3 「増田宋太郎遺稿集」所収五一折。
- 4 「柳田清雄遺芳」所収一七六頁。
- 5 増田家文書(松下角一「疾風の人」所収一七九頁)。
- 6 松下前掲書一八〇頁。
- 7 安形氏はこゝから、先の川村書簡の「結社創業」を愛国社創立と解し得るのではないかと指摘しておられる(安形「共愛社と天保義社」東京保護観察所職員会機関誌「まどい」二六号二〇頁)。
- 8 内藤正中氏は「立志社のなから、愛国社を創立しなければならぬ必然性を見出すことはできない」(内藤「自由民権運動の研究」四九頁)とされている。なお、共愛社を、愛国社結成を機に新たに結成されたものとされる同氏の見解(同書八四頁)は、採れない。
- 9 朝野新聞明治一〇年九月一九日(「新聞集成明治編年史」三卷)
- 10 安形静男「川村矯一郎」(「更生保護」二四卷一〇号所収四〇頁)。
- 11 河野広中「南游日誌」(庄司吉之助「日本政社政党発達史」所収一三五頁)。
- 12 大分県立図書館所蔵(マイクロフィルム)。以下同じ。但し七六年中は4・5・6号のみ。七七年は二部しかない。七八年二月以降七九年六月までと、同一一月から八一年の停刊までは、ほとんぼ揃っている。

- 13 「田舎新聞」一四九・一五一・一五三号。
- 14 三田演説会記録（家永三郎「植木枝盛研究」所収七七～九頁）。
- 15 「福沢諭吉選集」（岩波書店八一年版。以下同じ）一三卷一〇六頁注。明治三年には県立大分中学校長。
- 16 「田舎新聞」七九号。
- 17 同右七八号。
- 18 同右一八九号。
- 19 同書下卷二九八頁。
- 20 「大宇佐郡史論」八五二頁。
- 21 「南游口誌」（庄司前掲書所収一二四頁）。
- 22 熊谷克己「大中津志」稿（中津市小幡記念図書館蔵）。
- 23 中津藩「分限帳」（赤松文二郎「扇城遺聞」所収二五四～八頁）。
- 24 「交詢社員名簿」（「立命館大学人文科学研究所紀要」二四号）および田舎新聞二一七号。
- 25 「自由党史」や「公公決議録」は「長二郎」としているが、岩田英一郎氏蔵の寄留簿コピーにより「長次郎」を採る。
- 26 「南游日誌」（庄司前掲書一二四頁以下）。
- 27 松永昌三「中江兆民」七七頁。
- 28 「交詢社員名簿」（前掲書）
- 29 熊谷克己前掲稿。
- 30 明治一四年県会日誌（麻生鍊太郎氏蔵）。
- 31 大悟法雄太郎「大分県紳士録」（明治四〇年）三六九頁。
- 32 「田舎新聞」一九六号。「南豊新聞」二二一号。（「南豊新聞」は岩田氏所蔵コピーによる。以下同じ）

- 33 「田舎新聞」八二・八三号。
- 34 同右一二七・八号。
- 35 同二一九号。
- 36 板場雄三郎文書（岩田氏藏）
- 37 中津藩「分限帳」（前掲書三三八頁以下）。
- 38 熊谷前掲稿。
- 39 「田舎新聞」二七一号。
- 40 同書下卷二九八頁。
- 41 「西海新聞」明治一五年二月二日。「大分県紳士録」三六九頁。
- 42 「大分県紳士録」二七九頁。
- 43 「下毛郡誌」六八二頁。
- 44 「田舎新聞」二五三号。
- 45 「大分県紳士録」二八〇頁。山本艸堂「下毛郡誌」六五七頁。
- 46 「田舎新聞」二四〇号。
- 47 同右一八三号。
- 48 同右二五三号。
- 49 「下毛郡誌」七四四頁。
- 50 「田舎新聞」一一四号。
- 51 「大宇佐郡史論」八〇四頁。
- 52 「県治概略」卷二〇所収「無号布告」

- 53 「田舎新聞」七五号。
- 54 香川真一自伝稿（「瀬戸内海研究」一二号所収七一頁）。
- 55 「自由党史」中卷一六三頁。
- 56 「朝野新聞」明治十五年九月二十九日。「立憲政党新聞」同九月二十八日号。天皇に酒税軽減を建白しようとしたが大分県庁を経て却下された。（家永「植木枝盛研究」二四二頁）。
- 57 「田舎新聞」二六九号。
- 58 同右二六九号。
- 59 同右一三一号。
- 60 同右一二五号。
- 61 大分県立図書館蔵。
- 62 大分県教育研究センター佐藤節氏の御教示による。
- 63 「田舎新聞」二二三号。
- 64 「自由黨員名簿」（明治史料研究連絡会刊「明治史料叢書」）。
- 65 「田舎新聞」一八九号。
- 66 同右二五二号。
- 67 68 同右一二四・一七七号。
- 69 同右二三六号。
- 70 同書下巻二九八頁。
- 71 72 「南豊新聞」二二五号。
- 73 「地方巡察使復命書」下巻二九八頁。

- 74 「南豊新聞」二一五号。
 75 同右二一九号。
 76 「田舎新聞」九九号。
 77 同右八七号。
 78 「大宇佐郡史論」六二〇〜二頁。
 79 同書下巻二九八頁。
 80 水野公寿「相愛社の展開過程」(『近代熊本』六号)。八一年一〇月二二日には、徳富猪一郎らと一緒に演説をしたこともある。
 81 「南豊新聞」二九五号。
 82 「地方巡察使復命書」下巻二九八頁。

二 愛国社—国会期成同盟—自由党の潮流への参加

一八七五(明治八)年、愛国社創立大会が開かれた。「自由党史」は、概に應じて大阪に集まるものとして、九州から「筑前の越智彦四郎、建部小四郎、豊前の増田宗太郎、梅谷安良、薩摩の鯨島某、肥後の宮崎八郎」らの名をあげている。しかしこれについては岩田氏の考証があり、増田書簡からみて、増田は大会に参加していなかったとするのが正しいであろう。

ところで、「自由党史」自身が認めているように、集まったのは「絶えて富豪縉紳の徒なく、一劍單身、唯だ赤誠を国に許す士族の徒ありしのみ」で「愛国社創立の景況、此の如く甚だ好結果を得ず」、ほとんど活動らしい活動ができなかった。したがって、増田の共愛社も、その活動は共愛社自身の判断で行なわれねばならなかったわけであるが、しかし実態は共愛社としての活動方針を確立していたかどうかは疑わしい。増田書簡に「大事業ナルヲ以テ未ダ万分ノ一モ相運バズ(大事業ト申ハ民会ノ事ヲ言)朝夕共慮此事ニ御座候」とある七五年四月、山尾忠二郎や川村矯一郎らは大阪に居り、またこの「民会」が、

もし「中津歴史」がいう「中津公会」を指すとすれば、その発足の前月の七五年一〇月には増田は上阪してしまっており、増田ないし共愛社が中津公会創立の推進力であったとは考えられないのである。⁵内藤正中氏は「豊前共愛社の戸長征伐をうたった西豊人民へのアッピール（中略）は、林や自助社が意図した民衆啓蒙の段階をこえたものとして注目されねばならない」と⁶評価しておられるが、「西豊人民御中」のアッピールは、七七年の蜂起の際に出されたもので、それ以前に増田らによる「戸長征伐」的な動きは全くない。下毛・宇佐二郡が七六年に福岡県から大分県に編入されたとき、戸長官選命令が出され、中津でこれに対する反対運動が展開されるが、この時期にも増田は鹿兒島に桐野を訪ねており、増田編集長の「田舎新聞」も、戸長征伐を語る記事を載せていない。

増田については別に考えてみたいが、さしあたって立志社―愛国社の線で見れば、むしろ中津にはいなかった川村矯一郎、村上一策、石松勝一、岡部伊三郎らの方が、立志社内武装蜂起派の林有造、大江卓らと深く結びついていたのであって、そこに七七年のいわゆる高知の獄が起るのである。

林、大江に対する大審院判決によれば、岩神島、川村、陸奥宗光らによる木戸暗殺計画は、林、片岡健吉らの挙兵計画の一環を為すもので、計画を最も過激に主張したのが川村、村上ら中津グループであったとされている。しかし「藤好静、村松正克の二人忽ち縛に就き、未だ数日を経ざるに、岩神島、川村矯一郎等も亦た捕はれ、陰謀漸く洩る」ことになった。そして川村の「自訴」により、林らの陰謀の全体が発覚したとされ、そこに川村密偵説が成立する。⁹しかし、これに対しても岩田氏の¹⁰考証によって疑問が提出されている。川村密偵説は「西南記伝」から出ていると思われるが、しかし彼の刑が他と比して特に軽かったとも思えないし、出獄後に彼が静岡監獄の典獄になったことも、それが一八八六年のことで、出獄から七年後のことであつてみれば、密偵であつたとする根拠にはならないであろう。¹¹

むしろ「林有造氏旧夢談」は、別人に密偵の疑いをかけていると読め、同事件で下獄した村上、岡部らと川村の書簡往復も続いており、彼が取調べのある段階で「自供」したことはあつたとしても、密偵ではなかつたと思ふべきであろう。

この獄で捕えられた中津人は、川村、岡部、村上、石松の四人であるが、その後も民権運動にかゝり続けたのは村上二策である。その村上の八〇年八月二六日付川村宛書簡に「永田一二バ愛国志林編集月給三十円ニテ在坂セリ」とある。この永田一二によって、中津と立志社―愛国社の結びつきは新しい性格をもち始めるのである。

永田一二は、中津稲堀町の士族で、慶応義塾に学んだ。その彼が、高知の立志学舎の教員として招聘されたのは、七七年七月、川村ら逮捕の一ヶ月後であった。立志学舎の設立は七四年であるが、その教員には江口高邦、深間濶基、城泉太郎ら慶応出身者が多かった。永田もその一人であったわけで、「三田演説会記録」にも永田の演説が記録されている。¹³『自由党史』は「十年の冬より十一年春初に互り、一劍稽留するの志士、福岡の頭山満、越前の杉田定一、三重の栗原亮一、岡山の竹内正志豊前の永田一二等あり¹⁴」とのべており、また「田舎新聞」六四号に「旧友ニ告ルノ文」と題する永田の文章が掲載され、他にも書簡は彼の中津の旧友に届いていたはずであって、さらに七八年十一月に高知を去ってから八〇年までの間のある期間に、中津市校教員として帰郷している。¹⁵こうして、共愛社や増田が見ていた立志社―愛国社とはちがう姿の、立志社とその運動方向が、永田によって中津に伝えられることになった。

もっとも、彼の「旧友」がだれであったかについては、若干の問題はある。

七八年四月、立志社は杉田定一、安岡道太郎を九州遊説に派遣するが、高知の獄があったにもかゝらず、また永田が高知に滞留中であつたにもかゝらず、¹⁶彼らは中津方面にむかおうとしなかつたし、同年一二月の植木の九州遊説も、豊津までは来ながら、中津には来ていない。¹⁷七八年四月―一月といえ、中津では亦一社の演説会活動が最も活発に展開していた時期であり、もし永田と亦一社の間に緊密な連絡があつたのなら、植木が中津まで足をのばすことがあつたかもしれない。しかし永田一二は、旧藩時代は藩主の御茶之間付、ついで世話役、廃藩後はその供付として上京し、このとき慶応義塾に入っているいわば藩主側近グループに属していたのに対して、亦一社員が、旧藩時代の上士層あるいは藩主側近グループを含んでいなかったらしいことは、考慮しておかねばならないであろう。

その亦一社が、再興愛国社―国会期成同盟の潮流に参加してゆくことになる。

一八七八年九月、愛国社再興大会が開かれる。九州からは佐賀の木原隆忠、鍋島克一、武富陽春、豊津の友松醇一郎、久留米の川島澄之助、熊本の佐野範太、福岡の進藤喜平太、頭山満らが参会した。¹⁸呼びかけの有無は不明であるが、大分からの参加はない。すでに亦一社は精力的な演説会活動を展開しているが、友松醇一郎の「今斯ニ設立スル愛国社ハ其旨意未タ委細ヲ解セス」という発言が、当時の中津にとっても実情であつたらう。田舎新聞は九二・九六・一〇二・一〇八・一一〇・一一四号と関係記事を雑報欄に掲げて関心を示してはいるが、内容に触れる報道ではない。

中津亦一社は、七九年三月の愛国社第二回大会から参加する。たゞ、参加者がだれであつたかはわからない。田舎新聞は三五号に関係記事を一度載せているが、中津から参加のためにだれかが上阪したという記事はなく、亦一社関係記事の中から²⁰も、それらしい動きを伝えるものは見いだせない。しかし「公会議事録」によれば、亦一社は愛国社分担金一円を引受けており、何らかの社内での打合わせはあつたものと思われる。岩田氏は、この参加者を上田長次郎であろうと推定しておられるが²¹いずれにしても亦一社は、これを契機として、従来の政談結社から明確に政社へと成長を上げてゆくことになる。

すなわち、七八年五月の福岡向陽社での集会には参加していなかつた亦一社は、七九年五月の九州各社連合会には初めて出席し、同年九月の久留米での連合会にも参加しているのである。²⁴

ところで、この九月の連合会は、愛国社第三回大会にそなえての集会であつたが、その愛国社大会は一月七日に開かれた。

九州からの参会者は、「自由党史」によれば、久留米共勉社の厨良秀、豊津合一社の杉生十郎、福岡共愛会の平岡浩太郎、島原の真田幸勝、熊本相愛社の広田尚、佐賀の武富陽春そして「中津の宮村三多」であつた。²⁵また「大分県政党史」は、上田長次郎、宮村三多、笹部雅雄の名をあげている。²⁶しかし、「田舎新聞」一七五号に、一〇月二十九日に南摩昇二郎が大会参加のために豊中丸で出発したという記事があり、河野広中の「南游日誌」に、同三十一日、河野が南摩と会つたという記事があつて符号する。²⁷河野は上田長次郎から、亦一社の社長は「宮村三多氏ナルヨシ」を聞いていながら、大会前後の九州人との交渉の

記事の中で宮村の名をあげていない。「公会議事録」にも「中津亦一社南摩昇二郎」が議席についてたことを記録して、この大会に出席したのは宮村ではなく南摩であつたと断定してよいであらう。

なお、上田長次郎は、書記として参加している。²⁸「南游日誌」によると、河野広中が高知を訪れた七九年一〇月初めに、上田はすでに高知にあつて植木枝盛らと接触しており、河野が植木から中江篤介の民約論の内容を聞いたころ、河野とも頻りに往来している。²⁹こうした上田の行動と、愛国社大会書記をつとめたことを結べば、上田の今後のコースについてある示唆を与えるものと言えるであらう。

さて、愛国社第三回大会は、よく知られているように、立志社を中心とする愛国社のセクト的運営に対して、九州派を中心に痛烈な批判があいつぎ、土佐派の主導権が大きく後退したことを特徴とする。³⁰その中での、当面わたしたちの問題にかかわる論争点をあげれば、次の二点であらう。

³¹すなわち第一点は、翌年三月に提出することを決定した国会開設の請願書を、愛国社の名においてするか、「広く公衆ト俱ニ」³¹するか、という点であつた。第二点は、愛国社運営の問題、とくに立志社が提起する愛国社機関紙の発行の問題であつた。

さて、大会に参加した九州各社は、大会直前に「内会」をもって周倒な打ち合わせを行なっており、河野広中や杉田定一もこれに参加している。とくに河野は、しばしば上田長次郎、南摩昇二郎、村上二策らと往来し「詩歌ノ雅会」をおこなつたりもしているのである。村上二策の明治義塾は、当時中津人の宿所ようになっており、一月四日の内会に「政府ノ内幕ヲ密告」³²しに來たりして、民権運動のシンプ的存在だつたようである。

大会では、第一点について福岡正倫社の平岡浩太郎が「只ニ愛国社ニ偏倚セス広く有志ヲ募リ」国会開設を請願すべしと主張し、これに豊津の杉生、久留米の厨、中津亦一社の南摩昇二郎が賛成し、杉田定一が「愛国社而已ニ限ルハ偏頗ナリ」とダメを押して、九州グループの主張が土佐派を押し切つたのである。³³

次に第二点について、福岡の平岡が「従前本会ニ議定セシ事件中其実行ハレス己ニ新聞起業分担金ノ如き不都合ノ事アリ」

と、愛国社運営を鋭く批判し、福岡正倫社・久留米共勉社、佐賀、豊津合一社および中津亦一社の五社連合で、新聞起業の中止を求める建議を發したのである。³⁴それは、愛国社運営における土佐派の独走に対する反発と共に、一面では七九年段階での愛国社加盟各社の活動状況、とくに財政窮乏の状況―西南役以降の異状な物価騰貴が進行していた―をふまえた現実的対応策でもあった。³⁵事実、九州についても、熊本観光社はすでに解散し、相愛社も七九年三月大会で八三銭の分担を約しながら、一月にはその負担ができなくなっていたのである。³⁶

新聞起業中止の建議は、けっきよく「新加入各社並ニ方法考案アル各社ニテ評議然ル可」くすることとされ、ここからやがて「愛国志林」の發行が出て来ることになるが、後述する。³⁷

さて、中津亦一社は、大会決定にもとづいて直ちに活動を開始する。すなわち、同年一二月、「国会開設ヲ請願セザルベカラザル義ニ付意見書」³⁸を發表し、ついで国会開設請願書の同意署名の獲得に乗り出したのである。

ところで、こゝで亦一社が、どのような思想的レベルと傾向にあったかを、上記意見書および、八〇年三月に元老院に提出された「国会創立ヲ請フノ建言」によって、検討してみることにしよう。その論旨を、二ツの文書によって要約整理すれば、次のようになる。(傍点筆者)。

(一)「凡ソ国ハ人民ノ氣力ヲ以テ立ツ」ものであるから「氣力發達セズシテ国辱ヲ雪キ、国權ヲ恢復スルモ、ノ古ヨリ未ダ嘗テ之アラザルナリ」

(二)しかるに「今や世界各国外ニ德義ヲ表スルトイヘ、内吞嚙ヲ逞フ」しているのに「国会ナキノ我日本ハ政府ノ身代ハ政府ノ独り私任スル処即チ量入為出ノ財政タルヲ以テ若其各国外等ノ國權ヲ皇張スル即チ陸海軍費ノ如キ未ダ充分ナラサル処アリトイヘ、之ヲ如何トモスルヲ能ハス」

(三)それは結局、「我日本ノ人民ハ無氣無力ナリ因循偷安進取ノ氣象ニ之」しいからであるが、「氣力ノ發達スルト萎靡不振トハ之ヲ要スルニ未嘗テ国会ノ興ルト興ラザルト、二分岐セズンバアルベカラ」ざるものであって、従つて国会開設こそが急務

なのである。

四では国会は如何なる権限をもつべきか。「凡ソ人身ハ活物」であるから「彼是異見ナキ能ハス異見ノ極遂ニ軌轢相争フニ致ル」から「議政ノ権ヲ国会ニ総括」して調整しなければならぬ。

五また「凡ソ人身各情欲ナキ能ハス其財政ヲ執ルニ及ンデ同情同欲ノ極遂ニ壟断相私スルニ至ル」から「行政官吏ヲ監督スル」ことが国会の役割である。

六ところが「大政府ノ国会ヲ漸進ニ付スルハ蓋全国人民ノ無知蒙昧ニシテ俱ニ事ヲ議スルニ足ラズトスル」からで「學術上」はそうかもしれない。しかし「人民良知良能アリ其選ハレテ代議士トナルヤ其議スル所己レカ躬行経歴上ニ密接スル法律ト財政ニ係ル（中略）各地ノ民情ト習慣法トニ至テハ」學者の見解、「ニ優ル所アルヤ必セリ」

七「之ニ由テ之ヲ観レハ国会ヲ廢藩立県ノ際ニ創立スルモ決シテ尚早シトナスベカラス」

起草者がだれであるかわからないが、一読して、次のような特徴を指摘することができよう。

第一に、明瞭な国権主義的傾向である。国会は、何よりも国民の氣力を高めるものであり、国権皇張のエネルギーにそれを転化させるものとして位置づけられる。それは、国会によって、國民を国家権力に統合しようとする論理とさえ見ることができらる。

しかしそれは、第二の特徴、すなわち國際情勢について、欧米帝国主義の脅威の切迫という認識が極めて強いことと結びついている。具体的には「何ヲカ国権ノ張弛ト言フ条約改正是ナリ」と言うのである。

第三に、全文中に、ついに「民権」という文字が見いだせないことであり、そのこととおそらく同根であろうが、第四に、国家権力と人民の關係、したがって国家や社会の構造的認識を全く欠いていることが指摘できよう。せいぜい「行政官使」が「同情同欲ノ極遂ニ壟断相私スル」ことが非難されるにとどまる。

これを福沢国会論と比してみれば、国権拡張のための国会開設「内安外競」³⁹のための国会開設という論旨の相似にもかゝら

らず、例えば福沢にある「国会は固より政権を争ふの論壇にして、異説抗論の戦場」(傍点筆者)という認識はこゝには全く見られないのであって、単に未熟というだけでなく、それらは別のものと言うことができるのである。むしろ求めるならば増田宋太郎の系譜とすべきではなからうか。むしろ、増田にあった強烈な平田国学的天皇幻想はなくて(喪って)開明君主としての天皇とその政府というイメージに代っており、それがまた建言書や意見書の文章から迫力を失わせているにしても、である。

ともあれ、わたしたちは、中津亦一社の在地の人々(在阪の上田長次郎や永田一二らは区別されるべきであろうことは後述)が、国会開設要求の拠って立つべき論理として獲得していたものは、およそこういうものであったことを知ることができるのである。

41 もちろん、以上から亦一社の思想や国会論を、単に国権主義的であると批評し去ることは易しい。しかし、岩田氏が指摘するように、国会即時開設論(前述七)において、また何より人民の生活に即した智恵への信賴(前述六)において、それはやはり紛れもなく自由民権の思想的モメントを有しており、もしそこにすぐれた政治的・思想的な指導があったならば、彼らはその限界を乗り越える可能性はあったとしなければならぬのではなからうか。

さて、亦一社による国会開設請願の署名活動は、どのように進められたのだろうか。

この頃、後述するように、中津には交詢社の組織化が進んでいた。交詢社は、いうまでもなく福沢が立志社―愛国社系の「駄民権論」圧倒を目ざして組織したものであるが、その実務を担当した小幡篤次郎が帰津したのは、まさに愛国社第三回大会の期間であった。そして、その結果が、一八八〇(明治一三)年一月に発足した明治庚辰講談会であった。その活動については後述するが、要するに「昨年来続々演説ノ公会起リ某社某会ト称シ(中略)曰政権曰民権ト」唱える輩に対抗して、「当地紳士」「当地ノ有力者」が結集し、人々の「愚昧ヲ啓」こうとするものであった。⁴² 田舎新聞もまたその陣営に投じ、演説会はその社屋を会場とする。

亦一社の請願人署名の獲得は、こうした環境の中で進められた。意見書発表の二二月から八〇年一月二〇日頃までの四〇日足らずの間に、しかし上毛・下毛・宇佐三郡で五八〇名の請願人を獲得したのは、決して小さくはない成果としなければならぬであらう。署名獲得のオルグ活動の具体相は不明であり、署名者の名前もわからないが、亦一社員にいわゆる名望家や戸長などはいないようであって、相当の辛苦があつたのではなからうか。

八〇年一月二日夜、桜町明蓮寺で、国会開設を請願する「人民の代表」が集会した。⁴⁴この席で、請願人代表として土族宮村三多と平民飯田三治が上京委員に選ばれる。彼らは、一月二九日に上京の途につき、二月九日、元老院に「建言」書を提出した。⁴⁵

ところで、愛国社大会の決定では、各地の請願書はいったん愛国社に一括することになつてゐた。「自由党史」が、岡山の「両備作三国有志人民」の請願や、福岡の共愛公衆会の請願などが、八〇年三月の大会前に提出されたことを「是れ実に国会願望の先駆たるの名を取るに急なるの余り、此挙に出でたるものにして、識者の肩をひそむる所」と非難してゐるのは、内藤正中氏が指摘しておられるように、この二ツの場合は愛国社と無関係であつた以上、愛国社中心主義的独善と言わざるをえないが、亦一社の単独提出については、九州連合会で連携のある福岡の動きに刺激されたということがあつたとしても「自由党史」の批判は実情をついてゐたと思われる。

さて、愛国社第四回大会は、八〇年三月一五日から始まつた。会する者、二府二県八万七千余人の総代一一四人と「自由党史」は記す。その中に、上毛・下毛・宇佐三郡人民六三九人の総代として、亦一社員上田長次郎が出席する。(宮村は、請願書を提出した後、大会には出席せず、三月六日に帰津している。飯田はそのまま滞京したらしい。)⁴⁸

ところで、前大会で立志社―土佐派と真つ向から対立した九州グループは、このたびも事前に福岡向陽社で九州連合会を開催して、大会の対策を講じたらしい。⁵⁰一方、土佐派も「前回の九州グループおよび自郷社などの反主流派による立志社主導権の否定に對抗して、第四回大会であらさな主導権の回復」⁵¹をはかるのであるが、そのための方策の一つとして、大会二

日前の三月一三日に「愛国志林」を「我社一手ニ其一切ノ事ヲ引受ケ、以テ愛国社ノ為ニ一種ノ雜誌ヲ発闢シ」と、立志社独力での発行にふみきり、その開巻冒頭に「愛国社再興趣意書」を掲げたのである。⁵³「愛国志林」の中心は植木枝盛であるが、印刷長という肩書で編集に参加したのは永田一二であった。前記村上一策書簡には「編集月給三十円ニテ在阪セリ」とある。永田は、こゝでその代表作である「国会論」というすぐれた論文を連載し、亦一社の先に見た思想レベルをはるかにこえ、さらに福沢国会論の枠からもぬけ出て人民主権論の立場に進み出ようとしていた。⁵⁴もはや永田は、中津から、政治的にも思想的にも全く離れてしまっていたのである。⁵⁵

さて、しかし土佐派のまき返しの意図は、大会の冒頭から各地政社代表の抵抗にあい、結局は愛国社大会ではなく、別に国会期成同盟会を創立して、その大会として議事が進められることになった。「自由党史」は「集会条例発布の報達し、會員皆な内訌の非を悟り、議事漸く整頓して其局を収むるに至る」と記している。⁵⁶

期成同盟は、同盟への加盟は各府県ごと百名以上の組入人ある者に限る、と規約に定め、国会開設上願書の起草委員に長野の松沢求策と永田一二が指名され、奉呈委員には片岡健吉が指名された。⁵⁷起草には植木枝盛が「多く与り」⁵⁸有名な「国会を開設する許可を上願する書」ができあがったのである。

ところで、大会の終り近くに公布された集会条例は、運動を強く拘束することとなった。大分県下では、集会条例の適用の事例は見あたらないが、臼杵演説会が県に対して何を出している先述の事例によっても、その威力を知ることが出来る。中津亦一社は、集会条例について建白をおこなおうとしたらしいが、公文書館「上書・建白書目録」には見あたらない。⁵⁹

片岡らの上願書は、周知のように拒否された。三月の期成同盟大会は、上願書が受理されなかった場合「天下に遊説して益々全国の結合を謀り、本年十一月十日より大集会を東京に開く」ことを決定していた。⁶⁰にもかゝらず、国会開設請願は高揚する。八〇年五月から一二月一杯までに、一〇〇名以上の連署者をもつと確認できる請願・建白だけを拾っても、長野・秋田神奈川・山梨・茨城・新潟・愛媛・栃木・大分など二三件にのぼる。⁶¹この請願運動は、国会期成同盟の決定によるものではない

い。立志社―土佐派の動きは見られず、植木枝盛はすでに国会請願運動の効力に見きりをつけていた。⁶²

『田舎新聞』二一七号投書欄で、先に宮村と共に建言書提出の上京委員だった在東京三田の飯田三治が「国会論者ニ謀ル」と題して「岡山・宮城・広島・愛媛其他ノ諸県ノ国会願望同志ノ諸君ト謀リ本年九月ニ再ビ政府ニ之ガ開設ノ義ヲ建言スル処アラントス」と述べている。これはおそらく、八〇年二月、地方官会議傍聴のために上京していた二府二二県の府県会議員代表（大分県の参加はない）による国会開設促進協議、いわゆる「県議路線」の発展を背景としているものと考えられるが、三田に居る飯田がどうかかわっていたのかはわからない。

しかし、亦一社は再び国会開設上願の署名獲得にとりくんだらしい。おそらくそれは、期成同盟規約による組入人連印簿の作成と合わせておこなわれたものであろう。八〇年十一月、同盟第二回大会に参加した宮村三多の名で太政官に提出されたが⁶⁴連署者は「上毛・下毛・宇佐三郡同志五六〇名」であつたろうと思われる。⁶⁵

さて、十一月の期成同盟大会をひかえて、九月に「九州諸県の各有志社会の集合」が中津桜町本伝寺で開かれた。⁶⁶この会は後述するように流会に終り、一〇月に改めて福岡で会合したらしい。⁶⁷この福岡集会の詳細はわからないが「十一月の東京会議にて国会開設を請願するも政府の許可無きとは己むを得ず私立国会を設立すべし」と土州人は予て言ひ居る由なれとも九州各社の人々は之に加入せず愛国社をも脱して別に九州を團結したる一大社を立てんとする」⁶⁸協議が為されたらしい。

期成同盟第二回大会は、八〇年十一月一〇日に開かれた。亦一社からは先述したように宮村が参加した。

大会は当初、この大会そのものゝ性格をめぐる紛糾するが、宮村の「是如ノ枝葉論ニ許多ノ光陰ヲ費サスシテ早く決ヲ衆議ニ取ラン」という発言によって採決に移り、期成同盟第二回大会ではなく「大日本期成有志公会」としてもたれることになった。大会役員には福岡の郡利、香月惣経、箱田六輔らが河野広中、杉田定一らと共に名をつらぬ、土佐派の主導権は完全に後退し、立志社―愛国社―期成同盟という民権運動の発展系列は、桜井静の呼びかけを契機に進んだ県議路線―豪農民権の流れと合体したのである。⁷⁰八〇年五月の地方税の地租三分の一への引上げ、九月の備荒備蓄法の発令等をめぐる府県議会の激しい

斗争を、それは背景としてもっていた。もっとも、備荒儲蓄法で県令と激突した大分県議会のリーダーシップをにぎった人々は、必ずしも国会開設請願に強い関心を見せてはいないのであるが。

大会は八条からなる合議書を決定し、国会開設請願は公会としてはおこなわず、地方政社等が「之を為すは、其自由に任ずるに決⁷¹」した。宮村の名で太政官に提出された上願書は、この決定をふまえたものであろう。

しかし、この大会で最も注目すべきことは、来年一〇月の大会に、憲法見込案を持参研究することを決定したこと、および自由党の結成が提起されたことであった。運動は、人民自らがあるべき国家構想と政党を持つとすることを決定したこと、および

自由党の結成は、公会の席上、河野・郡・松沢の連名で発議されたが、小委員会において「盟約ハ国会期成ニ止マル・自由党ハ別ニ立ツ⁷²」と決定された。こうして、自由党結成の動きは公会の外で進められることになる。

まず一月二六日に愛国社関係者の集会がもたれ、杉田定一が「自由主義一大政党ヲ組織セン⁷³」と発言し、宮村ら参会者が賛成する。ところが、この杉田・河野らと植木ら土佐派が一緒になった愛国社系グループとは別に、新鴻の山際七司、長崎の松田正久、熊本出身の矢野駿男ら、のちに東洋自由新聞を創立するグループによる自由党結成の動きが進んでいた⁷⁴。結局この両グループは合同して、一月一五日、周知の自由党結成盟約が決定される⁷⁵。

ところで、この山際・松田・矢野らのグループだけで、のちに「東洋自由新聞」が創刊されるが、亦一社員の上田長次郎がその理事兼記者となっている⁷⁶。彼は、その後、西園寺退社の密勅事件で下獄したことは先にふれた。上田がどのようなにして、「東洋自由新聞」の理事になったのか、このグループが河野・植木・杉田らとは相対的に独立していたものであるだけに、何かの仔細がありそうであるが、不明である。

この年、つまり亦一社が愛国社一期成同盟の潮流に深くかかわって行った時期に「田舎新聞」は亦一社の演説会を全く伝えない。「田舎新聞」の政治的立場はあるとしても、国会開設請願の署名獲得の活動以外に、亦一社の在地での活動は必ずしも活発とは見えないのである。署名獲得の活動で手一杯だったということもあろうが、七八年から九年にかけて、あれほどの演

説会活動を展開していたことを考えれば、それは異常と言う他はなからう。

そして突然、亦一社は解散する。八〇年一月二〇日の「田舎新聞」二七一号は「亦一社は一旦解社して親愛社の解社したる連と合し興成社を結合、土地開墾と政談演説（中略）諸府県の有志家に交際を広く又は遊説等をも為す目論見」と報じている。それは社長宮村三多が東京に居た時である（彼が一月二六日の愛国社関係者の会合に出席していたことは前にふれた）

亦一社の在地での地盤沈下は、「田舎新聞」を見てゆくかぎり、七九年後半から確実に進行していたと思われる。おそらくその一つの原因は、財政問題ではなかったか。亦一社の愛国社負担金は、七九年月額一円、八〇年三月一円五〇銭、同年一月一円六〇銭となっているが、例えば「田舎新聞」二五七号に「社長月隔□氏、副社長宮村三多氏ら」が就産会社を作り、牧畜・開墾等を計画中という記事があり、これが先述した八〇年九月の中津での九州連合会の直前であってみれば、亦一社および亦一社員が、経済的にかなり窮地に追いこまれていたと見られるのではないか。じっさい、中津での米相場を見ると、八〇年一〇月に一石一一円の線を突破し、七六年一二月の約三倍弱に達しているのである。⁷⁷

第二に、社員が、地理的にも思想的にも四散して行ったことがあげられよう。南摩昇二郎、飯田三治は東京三田にあり、交詢社員となる。上田長次郎は「東洋自由新聞」創立グループに参加したらしく、もはや中津での運動からは、如何なる意味でも離れてしまっている。中山又二郎、蛸瀬暢造は攷法学会を結成し、亦一社に冷やかな「田舎新聞」社主中山本太郎らと共に法律学習にはげんでいた。⁷⁸新たに結成された興成社で、宮村と共に活動したことを確認できるのは敷田彦三郎だけである。⁷⁹

それは第三に、先に見た亦一社の思想的、理論的レベルと、期成同盟―有志公会へと発展する情勢の高揚との間の落差を、ついに亦一社が埋めることができず、愛国社―期成同盟の潮流に深くかかわって行けば行くほど、それはむしろ亦一社内部に亀裂を深めるように作用したと考えられるのである。ありていに言えば、宮村や敷田あるいは南正次らに、亦一社員の四散を許さぬ思想的・政治的な力量が不足していたということであろう。

そしてそれ故に、七九年末以降の明治庚辰講談会―交詢社との競争に、思想的にも政治的にも敗北し、下毛・宇佐地方での

地盤を固められてしまったことが、第四の、おそらく決定的な原因であった、と私は考える。

こうして、亦一社は急速に凋落して行った。八二年三月、下毛郡有志懇親会が開かれ、その中に宮村の名が幹事の一人として見えるけれども、しかしすでに主導権は加来紫吉、奥平每次郎、曾木定太郎、山口半七らの手に移ってしまっているのである。

八一年一月の、いわゆる期成同盟第三回大会には、笹部雅雄、上田長次郎の兄弟が参加する。彼らは、一四年政変直後の自由党結成に参加するが、自由黨員名簿中には、この二人の他に旧亦一社員の名は見えない⁸¹。上田は、国会開設詔が出て急進展する自由党結成の動きの中で、田母野秀顕とともに河野広中の代理として画策している⁸²。永田一二は、大阪の立憲政党に参加し、九州政進黨の結成に参画したらしい（後述）が、しかし彼らの軌跡は次第に中津―大分県の政治情勢からは離れて行くのである。

- 1 上巻一五八頁。
- 2 「中津自由民権運動史」三二頁。
- 3 上巻一六〇頁。
- 4 渡辺重春宛（松下竜一「疾風の人」所収二〇二頁）
- 5 「中津歴史」は、今泉ら福沢系の旧藩士士層のリーダーシップによるとする。（下巻二六四頁）
- 6 「自由民権運動の研究」八五頁。
- 7 「中津自由民権運動史」三九頁。「県治概略」明治一〇年三月二日庶布番外巻によって、民撰をかちとったことが知られる。
- 8 「自由党史」上巻二一四頁。
- 9 「日本政治裁判史録」上巻四二五頁。
- 10 「中津自由民権運動史」五一頁。

- 11 坂崎斌「林有造氏旧夢談」(明治文化全集二五卷所収八四頁)。
- 12 安形静男「村上二策覚書」(東京保護視察所職員会「まどい」二五号、八頁)所収。
- 13 家永三郎「植木盛研究」七八頁所収「三田演説会記録」。なお植木「日記」により植木が聞いたろうと推定はできるが、永田の立志学会行きをとくに植木に結びつける根拠にはならない。
- 14 上卷二二九頁。
- 15 「北陸政論」一一七五号(富山県立図書館)。
- 16 上卷二二二頁。
- 17 植木枝盛「日記」(家永前掲書所収一八二頁)。
- 18 上卷二四六頁。
- 19 「愛国社再興決議録」(歴史評論八六号所収七三頁)
- 20 庄司吉之助「日本政社政党発達史」所収八八頁。
- 21 「中津自由民権運動」八六頁。
- 22 家永三郎「植木枝盛研究」一八三頁。
- 23 「熊本新聞」明治二年六月一〇日。
- 24 「熊本新聞」明治二年九月二二日。
- 25 上卷二六四頁。
- 26 同書四二〇頁。
- 27 庄司吉之助「日本政社政党発達史」所収一三五頁。
- 28 「公会決議録」(庄司前掲書所収一〇一頁)。
- 29 庄司前掲書一三一頁。

- 30 内藤正中『自由民権運動の研究』一六一頁。
- 31 「公会決議録」(庄司前掲書一〇三頁)。
- 32 「南游日誌」(庄司前掲書一三六頁)。
- 33 内藤正中『自由民権運動の研究』一六〇頁。
- 34 「公会決議録」(庄司前掲書一〇五、六頁)。
- 35 内藤正中前掲書一六一頁。
- 36 明治二年三月「公会決議録」同一一月「公会決議録」(庄司前掲書九八・一〇九頁)
- 37 「公会決議録」(庄司前掲書一〇八頁)
- 38 「田舎新聞」一八九号。
- 39 「時事小言」岩波版選集五卷一五九頁。
- 40 「国会論」同選集五卷一五三頁。
- 41 「中津自由民権運動史」九一頁。
- 42 「田舎新聞」一九五号。
- 43 諸書に若干の違いがあるが、江村栄一「国会開設建白書請願書の考察」(『近代日本の国家と思想』所収)の国立公文書館「上書建白書目録」の数字に拠った。
- 44 「田舎新聞」一九五・一九七号。なおこゝでは署名者数を「式参百人」と、実際より小さく報じている。
- 45 国立公文書館「上書建白書目録」公二七一九。
- 46 上巻二六九頁。
- 47 「自由民権運動の研究」一六三頁。
- 48 「田舎新聞」二〇六号。なお大会での上田の「六三九総代」と、建言書の「五八〇人」の違いの理由は不明である。

- 49 交詢社員名簿および「田舎新聞」二二七号。
- 50 「田舎新聞」二〇六号。なお水野公寿「九州改進黨覚書」には今回の会の記載がない。
- 51 内藤前掲書二二九頁。
- 52 植木枝盛「立志社始末紀要」(『史学雑誌』六五編七〇号所収七七頁)。
- 53 「明治文化全集」一四卷九頁
- 54 同書一四〇三四頁。
- 55 後藤靖「自由民権期の交詢社の活動」(『天皇制形成期の民衆斗争』二二二頁)
- 56 上卷二七八頁。
- 57 上卷二七二頁。
- 58 家永三郎「植木枝盛研究」一八八頁。
- 59 「田舎新聞」二四〇号。
- 60 上卷二七四頁。
- 61 江村栄一「国会開設建白書請願書の考察」(『近代日本の国家と思想』所収一九一頁)。
- 62 家永三郎「植木枝盛研究」一九一頁。
- 63 内藤正中「自由民権運動の研究」一六四頁以下。
- 64 「小柳卯三郎文書」(江村前掲論文)
- 65 「自由党史」中卷二九頁。
- 66 「田舎新聞」二五六号。
- 67 「田舎新聞」二五九号。
- 68 「朝野新聞」明治二二年一〇月六日(『新聞集成明治編年史』)

- 69 「国会開設論者密議探聞書」(『明治文化全集集雑史篇』一六八頁)。
 70 後藤靖「天皇制形成期の民衆斗争」四八頁。
 71 「自由党史」中卷三四頁。
 72 「国会開設論者密議探聞書」(前掲書一八〇頁)。
 73 「国会開設論者密議探聞書」(前掲書一八六頁)
 74 山際七司「日記」(田中惣五郎「自由民権家とその系譜」所収一三〇頁)。
 75 「自由党」中卷三五頁。
 76 「田舎新聞」三〇〇号。復刻版「東洋自由新聞」。
 77 「田舎新聞」四号(古米一石四円)二七二号(新米一一円二〇銭)
 78 「田舎新聞」三〇二号。
 79 八一年二月長崎演説会に参加している(水野公寿「九州改進黨覚書」『近代熊本』一一号三二頁)。
 80 「大分県政党史」二五八頁。「地方巡察使復命書」下卷二九七頁。
 81 明治史料研究会編「自由党员名簿」
 82 家永三郎「植木枝盛研究」二二三頁。

三 九州連合—九州改進黨の路線への参加

大分の政談結社、政社の中から、愛国社—国会期成同盟の潮流に参加して行ったのは、以上に見てきたように中津亦一社のみであり、しかも在地での亦一社の凋落によって、この路線はついに中津—大分に定着することはできなかつた。しかし亦一社解散後も、宮村、敷田らが熊本相愛社員や立憲政党派出員らと遊説活動をしていたことはすでに述べた。それは「自由党史」が「純然たる自由党系」と述べる九州改進黨の結成にむかう流れの一部をなすものであった。

九州改進黨については、『自由党史』の言う通りであるかどうか検討を要すると思われるが、さし当っては、大分県の政談結社、政社が自己の政治路線をどのように自覚し定立していったかという、本稿の目的にかかわる部分についてのみ、水野公寿氏「九州改進黨覚書」（『近代熊本』一一号）によりながら以下に整理してみたい。

さて、自由民権運動の流れの中で、とくに西南役以後、九州人の土佐人に対する不信感が強く、つねに九州派が全体として結束して土佐派に対抗しようとしたことは周知の通りである。この九州結束というテーマは、しばしば九州各県政社の集會（水野氏のいわゆる「連合社」という形で現われ、それは後年まで政局に小さくはない影響を持った⁵）

九州連合社の集會を、年代順に整理してみると次の通りである。

(一) 一八七八年五月一〇日⁶

福岡向陽社に、福岡（箱田六輔）、佐賀（木原隆忠）、熊本（不明）が集まっている。大分からの参加はない。内容は不明

(二) 七九年五月一二日⁷

福岡向陽社に、熊本相愛社、觀光社、豊津合一社、福岡正倫社、久留米共勉社、佐賀とともに大分から中津亦一社が集まっている。向陽社が「九州地方各社ノ連合社ヲ設ケ（中略）本社ヲ置キ」と九州統合方針を提起した（時期尚早で廃棄）ことが注目される。その方針による遊説をおこなうことが決定され、大分では遊説の対象として「鶴崎、岡」があげられた⁸。遊説の実態はわからないが、おこなわれたとすれば熊本が担当したと思われ、相愛社の一木斎太郎が鶴崎で何らかの活動をしたことが認められる⁹。

(三) 七九年一〇月二六日¹⁰

久留米で開かれ、鹿児島、熊本、佐賀、島原、諫早、唐津、柳川、福岡、豊津と中津から参加している。人名は不詳である。先述した通り、愛国社第三回大会についての対策であったと考えられる。その成果が、九州五社連署の建議や「広く公衆ト俱ニ」するという組織議案における結束であったことは、前節に述べた通りである。

四八〇年二月末または三月初

「田舎新聞」二〇六号が「筑前福岡の向陽社にては先日より九州連合会を開きたり」と伝えているものであるが、出席政社内容とも不明。愛国社第四回大会の直前であつて、前回での九州派・土佐派の激突を考えれば、当然その対策協議は必要であり、水野氏前掲論文にはあげられていないが、会合が開かれたことは間違いあるまい。

（四八〇年九月二二日）¹¹

中津で開かれ、福岡の箱田六輔は数日前から滞在していたが、けっきょく流会に終つたことは先に述べた。注目すべきは、この会で「九州連合本部を設置すること」「設置の方法および規則等の草案」を作ることが決定されていることである。但し草案は初め中津亦一社が起草することになつてはいたが、この会で、別に福岡も草案作成をおこなうことを決定している。¹² 当分の亦一社の状況については先述した通りで、この決定も、亦一社にその役割を果たすのが困難になつていたことを示すのかもしれない。

（四八〇年一〇月二〇日）¹³

福岡で開かれ、熊本相愛社（池松豊記）観光社、唐津、佐賀、豊津（杉生十郎）久留米、柳川、三池、鹿兒島と、中津「及び豊後地方」が参加を予定している。先述したように、こゝでは民権運動ことに土佐派―愛国社系からの九州の分離独立について論議されたようである。なお「豊後地方」からの参加予定が注目される。事実とすれば、あるいは竹田（岡）からではないかと思われるが、今は不明としなければならぬ。

さて、以上のように「九州を團結したる一大政社」結成の構想は、年を追つて明確になつてゆくが、八〇年一―月段階では事なきを得た。しかし、八一年一〇月の自由党結成の段階で、河野広中という一難局に際して自ら陣頭に當たるを避け、形勢の一変するに際しては競ひて功名を銜はん¹⁴とする土佐派の横暴に憤激した「九州グループが総退場」する¹⁵。けっきょく、大会に出席していた九州からの代議員は、上田長次郎、笹部雅雄をはじめ全員が自由党員名簿に名をつらねはしたけれども、役員人

事でのこの両派の衝突が、自由党から分離した別政党を九州派だけで作ろうとする動きに、はずみをつけたことは間違いない（なお、地方支部の結成が禁じられていたということも、地方政党結成の背景にある）。

こうして九州派は、九州改進黨の結成にふみ出してゆくのである。

九州改進黨結成のイニシアチブをとったのは、熊本の公議政党であった。それは、急進的な相愛社と、漸進的な自愛会および立憲自由党が合同したもので、後者が主流を形成していた。公議政党は、八二（明治一五）年二月から九州各地に遊説を開始する。中津には沢村友義が派出されているが、彼がだれを訪ねたかはわからない。一方、同じ時期に、相愛社の松山守善、中津興成社の敷田彦三郎、のちに東洋社会党を興す樽井藤吉らが、立憲政党派員らとともに長崎方面で活動しており、公議政党の遊説計画には見られないが、その他にも各地への遊説、働きかけは当然あったろう。そうだとすれば、相愛社員秋岡徳郎の出身地の竹田もまた、当然その働きかけを受けたはずである。

かくて、八二年三月に開かれた九州改進黨創立大会には、大分からは竹田人が中心になって参加する。すなわち、議案起草委員に竹田貫墳社の野尻従吉、甲斐純が、²⁰大会の各社二名の議員に甲斐純と笹部雅雄が、²¹その他「自由党史」は「甲斐純、松井祝三郎、野尻従吉、石井碎蔵、森田謹一、後藤治」の名をあげている。²²

『南豊新聞』は権藤熊太郎を記者として大会に派遣しており、その報じる笹部の名が確実であるとすれば、笹部は当時中津において、沢村の遊説、働きかけに応じたのであろうか。『自由党史』の伝える六名は、九州改進黨員となった者を意味するようであるが、しかし福岡の頭山満、箱田六輔は、大会には参加したが入党はしていない。²³笹部をはじめ、福岡の吉田柄次郎や鹿児島島の柏田盛文、熊本の宗像政らは一方で自由党员であり、また立憲政党からは永田一二や新井毫が参加している。²⁴党籍については必ずしも分明ではない。

九州改進黨の綱領は、「玄洋社に代表される国権論、対外進出論的主張―士族民権的系譜と、柳川有明会、熊本公議政党に代表される漸進論的な民権論―豪農民権的系譜との対立」の末に、自愛会―公議政党のそれを継承した。²⁵すなわち

第一条 吾党は自由を伸暢し権利を拡張するを以て主義とす。

第二条 吾党は社会を改良し幸福を増進するを以て目的とす。

この第一条と第二条は、自由党盟約の第一章を二条に分けたものである。したがって、この限りでは九州改進黨を自由党系とする²⁵ことは無理ではないし、その中で国権論の系譜を排したという水野氏の指摘は、頭山らが入党しなかった事実と符合する。宮村、敷田ら旧亦一社が参加していないことも、それで説明できるかもしれない。

しかし、大分からは、先の甲斐ら竹田貫墳社のグループのほかに、副四郎一、江島久米雄、加藤茂弘らが傍聴参加していた。²⁶副は、年初に上京して矢野文雄、大隈重信らと会い、帰郷した直後のことであつたはずである。²⁷彼らは、九州改進黨の山田武甫、嘉悦氏房、宗像政らと、大分での政党団結について懇談しているが、貫墳社グループと接触した気配は見えない。²⁸

後述するように、副、江島らが大分改進黨を結成するとき、貫墳社グループが「自由を伸暢し権利を拡張する」を掲げるところを主張して、ついに退場してしまう²⁹ことを見れば、九州改進黨内の相愛会系と自愛社系の二つの潮流の関係は、かなり複雑なものであつたと思われるのである。

九州改進黨の組織綱領は、各県の組織を九州改進黨何部と称することとするが、³⁰しかし「本則に戻らざる者は其自治に任ず」とされた。事実各県のそれを比較すると、そこには相当に大きなひらきが存在する。²⁹すなわち、そこには「九州を団結」という七八年以來の一貫したテーマのもとで、実態としては必ずしも思想的、政治的な一体化は追求されず、むしろゆるやかな結合であつた点に特色があつたといえるのではなからうか。³⁰（以下、四・五節は次号）

1 胡麻鶴岩八が、どのようにして自由黨員になつたのか不明である。

2 中巻九七頁。

3 水野公壽「九州改進黨覚書」〔近代熊本「一一号」および後藤晴「自由民権」一七四頁〕。

4 「河野磐州伝」上巻四三九頁。

- 5 水野公寿「九州改進黨の再組織過程」(『熊本史学』号)。
- 6 家永三郎「植木枝盛研究」一八二頁。
- 7 8 『熊本新聞』明治二年六月一日。
- 9 『田舎新聞』二六二・六号で、一木翁太郎が鶴崎・大分方面でかなり以前から活動していた。と読める記事がある。なお二六六号で、彼は相愛社から除名されているとされているが、八二年二月の長崎での演説会では、相愛社員として演説している(『西海新聞』明治一五年二月一六日)。なお『大分県第三回(明治二二年)年報』にも、鶴崎、白杵で一木が、鶴崎士族木田織太郎らと活動の報告がある(三三六頁)。
- 10 『熊本新聞』明治二年一〇月二六日。
- 11 12 『朝野新聞』明治一三年一〇月六日。
- 13 『熊本新聞』明治一三年一〇月二日。
- 14 『河野磐州伝』上巻四一六頁。
- 15 内藤正中「自由民権運動の研究」二五九頁。なお『河野磐州伝』によれば、河野らが調停して役員選挙をやり直した(前掲頁)。
- 16 『自由党史』中巻八一〜四頁。
- 17 水野公寿「九州改進黨党書」(『近代熊本』一一号一五頁)。
- 18 水野前掲論文(前掲一五〜七頁)。
- 19 『西海新聞』明治一五年二月一・一五・一六日。
- 20 『西海新聞』明治一五年三月一八日。
- 21 『南豊新聞』二九三号。
- 22 『自由党史』中巻九五頁。
- 23 大津淳一郎「大日本憲政史」二卷五一〇頁。

- 24 水野前掲論文(前掲二九頁)。
 25 水野前掲論文(前掲三一頁)。
 26 28 『南豊新聞』二九五号。
 27 『地方巡察使復命書』下巻二九八頁。
 29 水野前掲論文(前掲三五頁以下)。
 30 『福岡日日新聞』明治一八年五月一二日社説に「他ノ政黨團結ニ比スレバ自ノツカラ寛潤ノ風ヲ帯ビ」云々とある。

(大分県立碩信高等学校教諭)

当会出版物のご案内

(会員一、八〇〇円 会員外二、五〇〇円)

- 大分県地方史料叢書(3)「豊前国村明細帳」(一) (下毛郡宮園村等所収)
(宇佐郡下麻生村等所収)
- 大分県地方史料叢書(4)「元祿・天保豊後国豊前国郷帳」(正保郷帳と並ぶ必携史料)
- 大分県地方史料叢書(5)「佐伯藩温故知新録・古御書写白杵藩旧貫史(1)」(藩別の必見史料)
- 大分県地方史料叢書(6)「豊後国旧管地沿革記・附録・豊後国各郡沿革記」(旧高旧取調帳の誤りを正す基本史料)

※ このほか大分県地方史料叢書(1)「豊後国の村明細帳」(3)(4)(5)(6)(7)(8)もあります。